避けては通れない話

京築支部　京築県土整備事務所　内屋敷淳一

平成２３年の夏、父が手術する事になった。

手術は６時間掛かり、それより２時間過ぎても手術室から出てこなかったら、“何か”あったと思ってくれという事だった。

手術前日の夜は病室で、

「目が開いたら天国やったらひったまがっどね？」

「はんな、何ゆうとっとな！はんが天国にいくわきゃなかどが！」

「おや、地獄いき？！」

「はんな、仏教徒やろが、“行く”のは極楽浄土、天国はキリスト教！目が覚めて、周りが金髪のきれかおなごん衆で言葉も通じんかったら、まあ、ひったまがいこっは、間違いなかどん。」

等と家族で軽口をたたいていた。

手術当日、父は静かに淡々としていたが看護婦さんに

「よろしくお願いします。」

と少し緊張ぎみに言っていた。

私達家族は、申し合わせてたわけではないが「大丈夫だよ。」という事を目で互いに父に示していた。

「それじゃ、いってきます。」

というので、「まるで特攻隊員みたいじゃない。」という冗談を言うのを押さえ、手術室前の待合室を示し、

「お父さん、そこで待っとでな。」

といって送った。

それから、家族で手術待合室にいき、椅子に座って待った。待合室は１０ｍ２ぐらいの広さで各々の辺に座れるようになっていた。入口側に私と妻、左斜めに母、右斜めに妹とその子（甥子）が座り、最初は、お茶を買いに行ったりとりとめもない話をしていた。

今回の手術は父の意向で、ここにいる人間にしか伝えていない。前年に東京の叔父（父の弟）が働き盛りの中、突然亡くなり、各県に散らばっている父の兄妹達が東京に集まった事があり、鹿児島組は年寄りばかりだったので、私がチケットの手配等し鹿児島空港から出発、バス等を乗り継ぎ葬祭場に一苦労して着いた事があった。父としては、まだ、どうなるかわからない事で親戚や多くの人を心配させたくなかったのかもしれない。（もっとも、”なんか“あったら母が親戚から議を言われることになるのだが・・・。）

余談になるが、この時の葬儀で、私の印象に深く残ったのは、火葬場に行くのに叔父の職場の前を通り、職員の方々が出てきていて「有難う。」と言ってくれて、叔父がみんなから愛されていたのが非常に感じられた事だった・・・。

しばらくして、母を見ると、口元は微笑んでいたが静かに座って何か考えている様子。その様子を見ていると、私が中学校の頃、父がぶっ倒れて入院し、もう駄目？！かという事があったのを思い出させた。母はこの時、“もしも”の時を覚悟はしていたようだったのが思い出される。母は父（私の義祖父）を中学生の頃に亡くしており、この頃、私と妹をみると口を一文字にして考えることがあってか“うん、うん”と頷くか、「兄妹二人しかおらんのだから、仲良くしていかんとね。」ということをよく口にしていた・・・。しかし、今回は、私も妹も結婚し、目の前には孫がいるのだから、前のような不安だけを考えてはいないようには見えた。

妹に目をやると、ぐずる息子を妻と一緒にあやしていた。以前、父が倒れたとき、二人で“もしも”の時について話し合ったことが会ったが、其の時はあんまり現実感をもって真剣に考えていなかった気がする。今になって振り返れば、今回より状況は逼迫していたのに暢気なもんだったのだと思う・・・。

手術は、午前 10 時から始まり、午後 4 時に予定終了する予定。が、予定の時刻を過ぎても出てくる気配はなかった。まあ、心配していてもしかたないと、取り留めもない事を考える事にした。

父が定年を迎えた頃、実家の土地の境界を私に見せるために、父が一緒に土地を見て廻った。土地と言ってもひと財産あるわけでなく、山林と田ばかりで金になるようなものではないが、引継ぎを兼ねてまわった。田の境界等は、昔から見慣れているので問題なかった。問題は、山林の土地。以前住んでいた家（土砂崩れで喪失）が建っていた山は、ほとんどが家のものだったので、小さいときからウサギを追いかけたり、狸が罠にかかってないか見たりしていた所だから別に問題はなかったが、隣との境界が妙なかたちだったのが気になったので、其の事のいきさつを父に確認した。うちの氏神様の祭っている位置から考えると、「どうしてこんなところに境界が？」てな感じだったからだ。回答は、元来、うちの土地だったが、祖父の祖父の時代にあるいきさつがあり、苗字と土地をわけたそうだ。これにより、同じ苗字で隣同士なのに血縁関係が全くない理由がわかった。（詳細は控える）他に、山に向かう、昔つながっていた市道の脇の藪の中。草を分け入ってみると、杉の木ばかりはえ、単なる藪の中だと思っていたところが、段々畑のように石積みがされていて、灌漑をきちんと行っていた形跡があり、父が小さい頃はこの辺一帯が開けた土地であり、父が私の知らない時に、この土地の木の枝払いに来ていたという事と、近所の城跡にも土地があるという事が新たに判った事だった。同じ風景でも、父が観ていた風景と私が観ていた風景は大きく異なっていたという事に気づかされた。家の土地の事ならある程度把握しているつもりだったが、全く想像していなかった結果で、ビデオカメラ撮影を用意しておいて良かったとつくづく感じた・・・。なんて事を思い出していた。そういえば、あの時聞けなかった疑問等を、後で聞こうと思ってそのままにしている。手術がおわり落ち着いたら、尋ねてみよう。

午後 6 時を過ぎたが手術室からまだ出てこない。何かあったようだ。

まいったな、これが別れだとは考えたくはないが、母や妹には、「大丈夫よ。」という一

方で、不謹慎ながら、後の段取りに頭がいってしまっていた。妻は妻の実家の法事関係を一手に取り仕切っているぐらい私より数倍世辞に長けているので、母や妹をうまく補佐してくれるだろう。後は、父の最期に華を添えてやらなければ！

あれれ、ちょっと待て、私は父を語るほど父の事を知らない事に気づいた。父と一緒に時に喧嘩しながら暮らせたのは、私が大学に行くまでの間であったが、父が自ら自分の事を話すことも無かったし、こちらから聞くことも無かった。唯一、若い頃、陸上自衛隊にいたという事と少林寺拳法、独楽回しの達人（私からみて）、祖父の代から切手を収集しているという意外な一面しか知らない。亡くなった祖父が、毎日、日記をつけていたという事も聞いていたが、実物をまだ見せてもらってない。考えてみれば、できるだけ実家に顔は出しているが、会うだけで父とゆっくり会話する事をしてきてなかった・・・。

今になって気付くとは、なんたる不覚。「父よ、まだ亡くなるの早いぞ、事務的な事だけ引き継いでもためにならん！もっと、語らにゃいかん。」という想いが強くなってきた。父に“もしも”の事があった場合の覚悟はできているつもりだったが、実際はそれ以前の未熟な状態だった。

午後 8 時を廻った時点で、手術室の前に出てきた看護婦さんに手術の状況を恐る恐る尋ねてみた。状況は当初予定していたより時間がかかっているが、悲観するものではないという内容だったので少し安堵した。

「おいが小学校の時、おいが消死にそで手術した時も、こげん掛かったっけ？」（私）

「あん時も長かったどん、こげまではなかったよ。」（母）

「じゃ、おいより医者どんに、なご体をみてもらっとんやっで、おいより元気になって出てくっど。」（私）

人間安心すると饒舌になるのか、上記のような軽口も話せるようになり、その後は、母に結婚当時の父の笑い話（半分は父に対する苦情だった）や、前回、父が倒れた時の話を母の切迫した状況を笑いを交えて聞いて待った。

結局、手術室から父が出てきたのは、午後 10 時を過ぎていた。ストレッチャーの父は意識が朦朧としているようだったが、私たちの声に気づいていた。手術をしてくれた執刀医の先生に、手術が長引いた理由や懸念された状況に問題ない事の説明を伺い、その日は午後 11 時に本当に安堵して実家に帰ることができた。

今回の父の手術は、前回の時と違い、「孝行したい時に親はいない。」という事と「家を継ぐ」という事への自分の認識の甘さを痛感した出来事だった。だからこのこと以降、私は、父だけでなく母、祖父母、義父母等のにまつわる話を記録として残そうとしている。まだ、話を聞き始めた段階だが、「こや、いけんしてん、語りつがにゃいかん。」という話がたくさん出てきていて、次の代のものが、私たち家族の事を身近に感じて貰える一助になればよいと思いながら、実家に帰るたびに父達の話を聞いている現在である。